

辻荘一文庫 (2)

辻先生寄贈分から、四旬節にふさわしい1冊を紹介します。

Orlando di Lasso: 7 Penitential Psalms ; An Edition of Munich, Bayerische Staatsbibliothek, Mus. MS. A 1 & II (MC1/L347/8)

悔悛し、神に立ち返ることを促す7つの詩篇を、13世紀のイノケンティウス3世が定め、教会は悔罪詩篇 *Psalmi Penitential* としてふさわしい時期に歌ったり唱えたりします。その7つとはすなわち、6, 32, 38, 51, 102, 130, 143です。3月1日より始まる四旬節にこれらを特に毎日読み味わうこともいい黙想になりますが、教会音楽を勉強する人たちはやはりそれに付けられた音楽にも目をむけるべきでしょう。

ルネサンスを代表する作曲家ラッソーは1559年にバヴァリア公アルブレヒト5世の求めに応じてこの7曲をまとめて作曲します。悔悛というのは宗教生活にとってもキリスト教音楽にとっても重要なモチーフですが、ラッソーはこれに前後して「ヨブ記に基づく9つのレクツィオ」「シビラの予言」「エレミア哀歌」「ペテロの涙」など悔悛をめぐる宗教曲の大作を作曲しています。それらはすべて資料室にありますので興味のある方は探求してみてください。

アルブレヒト公はラッソーを高く評価し、宮廷画家ハンス・ミーリヒに命じて楽譜のすべてのページに聖書的な、またはその詩篇に対応するようなふさわしい絵を描かせ、みごとな豪華本にしあげました。悔悛というものを詩と音と絵とで同時に味わうことのできる楽譜なのです。それらはミュンヘンの *Bayerische Staatsbibliothek* が所蔵しています。

さて、ラッソーはこれらを旋法の順に配列します。1曲めは第一旋法で、と言う具合に。しかし7つしかありませんから、第8旋法が残ってしまいます。そこで8曲目に *Laudate Psalm* という、赦された者の賛美と救いの喜びを歌う詩篇を付け加えて完結させます。これで宗教的にも、音楽的にも完璧なものになるというわけです。

この *Laudate* 詩篇 150 は、様々な楽器をもって神をたたえるように促しています。ティンパノ、チンバルム、オルガノと楽器名がたくさん出てきて、にぎやかな祝祭の雰囲気になっています。音楽家が大勢の器楽奏者と共に神を讃えるイメージが豊かにあり、音楽をする者が常に愛唱していたい詩篇です。

(続く)

杉本ゆり記